



和と力

2月号



売布小ホームページ

令和7年(2025年) 2月 3日

宝塚市立売布小学校

校長 藤山 昌生



2月3日、「立春」を迎えました。暦の上では「春」、新しい季節の始まりです。私は、子どもたちに児童朝会などの機会を通して、できるだけ季節の話をしています。そのため、国立天文台の「令和7年(2025)暦要項」を参照し、いつでも見られるところに置いています。今年は例年とは異なり、立春の前日、2日が「節分」でした。本来であれば、その暦要項で知るべきところでしたが、「2月2日、巻きずし受取」と自宅の予定表に書かれているのを見て、再確認しました。節分会を実施している

神社などは、豆まきなどでとても賑わっていたことでしょう。それと同じぐらい、スーパーの巻きずし売り場も賑わっていたということですね。

日本では、二十四節気が古くから大切にされてきました。それは、自然と人間の生活が密接に結びついているからです。二十四節気は、季節の移り変わりを細かく示すことで、農業や漁業、さらには日常生活における様々な活動の指針となってきました。例えば、農作物の種まきや収穫の時期を判断する際、二十四節気は重要な目安となります。また、季節ごとの行事や風習も、この節気に基づいて行われることが多く、私たちの文化や伝統に深く根付いています。

「立春(2/3~2/17)」は、寒さの中にも少しずつ春の兆しを感じ始める時期です。自然界では、木々の芽が膨らみ始め、小鳥たちのさえずりも聞こえてくるようになります。子どもたちには、この季節の移り変わりを感じながら、自然の豊かさや生命の力強さを感じてほしいと思います。自然の変化を感じることで、私たちは日々の生活の中で小さな幸せを見つけることができます。さらに、「立春」は春を呼び風が氷を解かす時期の「東風解凍(はるかぜこおりをとく)」、鶯が鳴き始める時期の「黄鶯睨睨(うぐいすなく)」、氷の間から魚が飛び跳ねる時期の「魚上氷(うおこおりをいずる)」の3つの「候」に分けられます。この候は七十二候といい、二十四節気七十二候で表すのが「気候」という言葉の語源です。

季節を知ることだけでも、言葉が豊かになります。言葉が豊かになると、他者とのコミュニケーションにおいて、いろんな言葉を「着替えながら」、その時々にあった多彩な表現が可能になると思います。「今年の節分は、いつもより1日早かったね」「今日から春だね」「今日は立春だね」「東風(はるかぜ)って、東風(こち)のことだよ」…という会話が弾むことを願っています。

“逃げていく”2月は、学年末に向けての大切な時期でもあります。子どもたちは、それぞれの学びを深め、次の学年への準備を進めています。特に6年生にとっては、小学校生活の締めくくりとなる卒業が間近に迫っています。そのような中、明日2月4日(火)には、「宝塚市教育委員会指定研究発表会」を開催し、国語科の学習を他校の先生方に見ていただく貴重な機会となります。子どもたちの頑張りに期待しています。